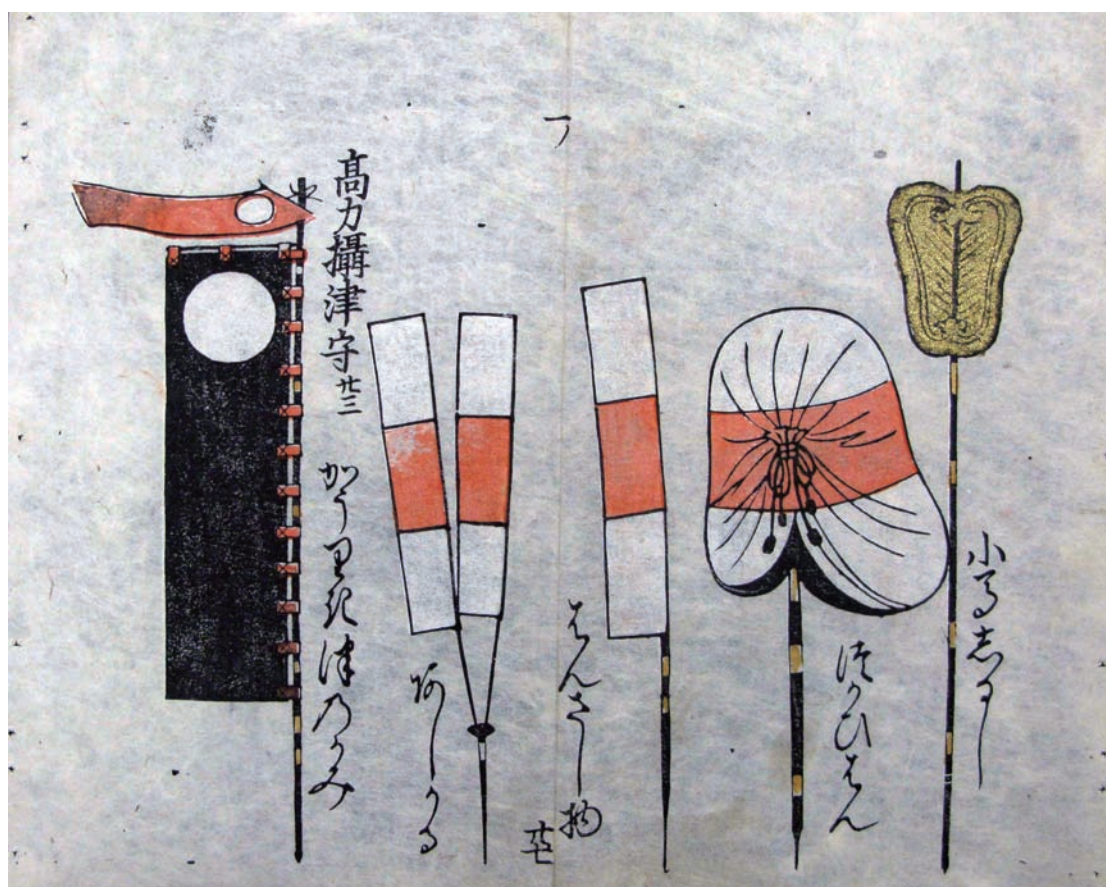


見る・読む・比べる II

—ドキュメンテーション学科による古典籍へのアプローチ—



期間：平成20年6月17日（火）～7月12日（土）

ごあいさつ

一昨年(平成18年)の10月から11月にかけて行った第111回貴重書展示に引き続き、ドキュメンテーション学科の教育・研究成果をお見せすることになりました。「古版本演習」と「古写本演習」という書誌学の中心的な演習科目で学生と共に調査した図書館貴重書のほか、本年度新たに購入した『御馬印』、3月に卒業生のご両親より学科に御寄贈いただいた「浅見覚堂文庫」から5点を展示します。古い書物そのものが持つ魅力を感じて頂ければ幸いです。

(堀川貴司・伊倉史人)

展示書目

[I] 多色刷りの魅力

1 〔御馬印〕 〔寛永(1624～43)〕刊 半紙本 全6巻のうち零葉37葉

[II] 徒然草の版本

2 徒然草 〔慶長(1596～1614)〕刊 古活字版 上巻1冊 大本
3A 徒然草 寛文7年(1667)刊 2巻2冊 大本
3B 徒然草 元文2年(1737)京・菊屋喜兵衛・求版後印 2巻2冊 大本
3C 徒然草 元文2年(1737)京・菊屋喜兵衛・求版後修 2巻2冊 大本
3D 徒然草 〔江戸後期〕大坂・敦賀屋九兵衛・後修本求版後印 2巻2冊 大本
4 徒然草 元禄7年(1694)刊 2巻2冊 半紙本
5 徒然草 宝永8年(1711=正徳元年)〔京〕和泉屋茂兵衛刊 2巻2冊 大本

[III] 歌集の写本

6 詞花和歌集 〔室町末〕写 10巻1帖
7 続古今和歌集 〔室町末〕写 20巻2帖
8 新後撰和歌集 〔江戸前期〕写 20巻1帖
9 続千載和歌集 〔江戸前期〕写 20巻2帖
10 実方集・頼実集 〔江戸後期〕写 合1冊
11 国基集 〔江戸後期〕写 1冊
12 後鳥羽院御自歌合 〔室町前期〕写 1軸

[IV] 浅見覚堂文庫より

*13 増冠傍註坐禅用心記 吉田義山編 明治20年序刊・京都貝葉書院後印 1冊 大本
*14 切紙并参話 昭和12年浅見覚堂写 1冊 半紙本縦長
*15 訂正古語拾遺 明治2年観齋家塾(木村正辞)刊 1冊 大本
*16 洪範全書 寛文7年(1667)序・〔京〕武村市兵衛刊 6冊 大本
*17 四書集註 民国22年(1933)上海・商務印書館刊 活版 6冊 大本

番外 坪内逍遙書簡 〔昭和5年10月〕6日付 守田勘弥宛

*13～17はドキュメンテーション学科所管

[I] 多色刷の魅力

日本の出版は、仏書を中心にして奈良・平安時代以来の長い歴史があるが、そのほとんどは単色・文字のみのものであった。江戸時代に入って、挿絵入りの書物が多く出版されるようになるが、多色刷が一般的に見られるようになるのは中期以降、いわゆる錦絵（浮世絵）の登場と相前後してのことである。それ以前は、ごく一部の挿絵にせいぜい朱と墨との二色刷あるいは藍を含めた三色刷を施すものが数点確認されるに過ぎない。その中で特筆すべき版本が今年度購入したばかりの『御馬印』である。

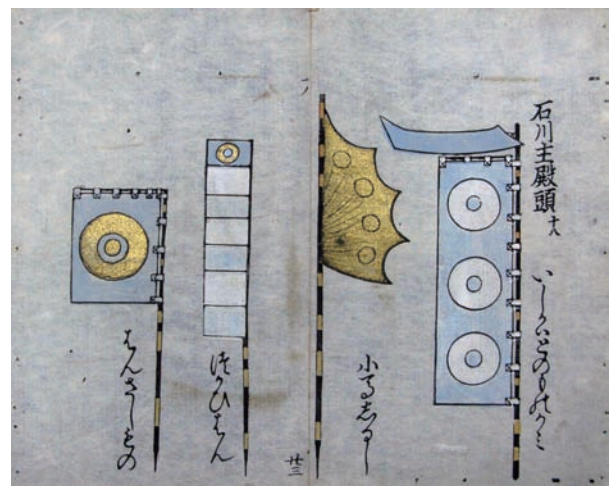
1 〔御馬印〕〔寛永（1624～43）〕刊 半紙本 全6巻のうち零葉37葉

本書は、将軍家をはじめ、各大名の旗指物や兜などを多色刷によって列挙した図鑑である。ほぼ全体にわたって墨・朱・黄・白・青の五色刷りを用い、さらに金・銀・薄墨・緑・赤・茶などの手彩色を施すところもあって、その豪華さは目を見張るものがある。

現状は1葉（23.7×29.4㎝）ごとにバラバラの状態であるが、左右両端にほぼ等間隔で5つの穴、それよりやや外側に大きめの4つの穴（2つずつ上下に）があり、前者は表紙と本体を合わせ綴じる綴じ糸の、後者は本体を前もって綴じる下綴じの紙縫のための綴じ穴である。すなわち、当初は袋綴の冊子本であったことを物語る。中央の折り目には「一ノ 十一」のように、巻数・丁数が表示されている（稀に丁数のみのものもある）。37葉の内訳は、巻1が13葉（第11・18・22～24・27～34丁）、巻4が12葉（第7・9・16・18・20～24・26・30・31丁）、巻5が2葉（第8・29丁）、巻6が9葉（第11・13～15・19・23・26・27・33丁）、巻数不明が1葉（第28丁）である。

この『御馬印』多色刷本の現存する伝本は、国立国会図書館（全6巻揃い）・早稲田大学図書館（巻1・4、<http://www.wul.waseda.ac.jp/TENJI/virtual/oumajirushi/>）・宮内庁書陵部（巻1）・天理図書館（巻3）・大東急記念文庫（巻5）など少数にとどまり、しかも国会図書館を除き完存するものはない（他に単色刷の後印冊子本は揃いが現存する）。また、これらはすべて卷子本の形態で作られているにもかかわらず、料紙中央に巻数・丁数表示があり、版木そのものは冊子本を想定して彫られたことを示していたが、その現物がここに初めて出現したことになる。

今後は国会図書館本等との比較により、巻数不明の1葉の解明や刷りの先後などを検討する必要がある。（岡崎久司「多色摺源流考証」（『江戸文学』25、2002.6）を参照した）

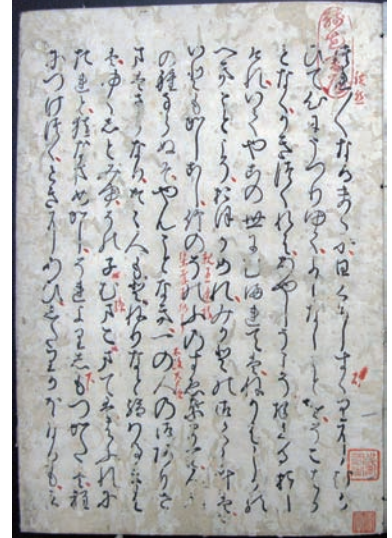


[II] 徒然草の版本

今でこそ、日本の古典文学を代表する作品の一つとして有名であるが、鎌倉時代末の成立から約250年、江戸時代に至るまで、ごく一部の人しかその存在を知らない作品であった。戦国の乱世が終わり、平和で豊かな生活を求めて、教養や教訓に対する欲求が人びとのあいだで高まったとき、うってつけの作品として脚光を浴びたのである。注釈書も作品本文も、多種多様な版本が刊行され、近世文学へも大きな影響を与えた。ここではその中から書誌学的に興味深いものを取り上げる。なお、高乗勲『徒然草の研究』（自治日報社、1968）および齋藤彰「徒然草版本の挿絵史（一）～（十三）」（『学苑』738、2002・1～769、2004・11）を参照した。

2 徒然草〔慶長（1596～1614）〕刊 古活字版 上巻1冊 大本

古い栗皮表紙（原装か）、26.3×19.4 糎。外題なし。本文、無辺無界11行20字前後、字高22.8 糎。全77丁、全丁全面裏打ちを施す。蔵書印「挹翠居書画記」（不明）「残花書屋」（戸川残花）「資南」（戸川浜雄）「春齋堂」（若林正治）。『徒然草』初期の古活字本としては嵯峨本数種と烏丸本が知られているが、本書もそれに近い時期の刊行であろう。高乗氏著433頁に「若林正治氏蔵本」として解説される「木活字十一行本」そのものである。表紙裏打ち紙に「おもひ入との二義」「とかりたる妙なりさても言所」といった文言が印刷された反故紙を用いており、この出典が判明すれば刊行時期が特定できるかもしれない。



3 A 徒然草 寛文7年（1667）刊 2巻2冊 大本

3 B 徒然草 元文2年（1737）京・菊屋喜兵衛・求版後印 2巻2冊 大本

3 C 徒然草 元文2年（1737）京・菊屋喜兵衛・求版後修 2巻2冊 大本

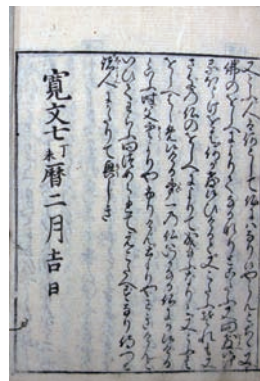
3 D 徒然草〔江戸後期〕大坂・敦賀屋九兵衛・後修本求版後印 2巻2冊 大本

ここに挙げた4点は、同じ版木を100年以上にわたって使い続けているものである。

まずAは、上巻62.5丁、下巻50丁で、下巻末に「寛文七（丁未）曆二月吉日」という刊記がある。本文、四周単辺無界12行21字前後、段毎に改行、各段冒頭上欄に段数表示。句点（○）・ふりがな・濁点あり。既に版面が荒れており、後印である。



3 A上巻4丁ウラ・5丁オモテ



3 A刊記

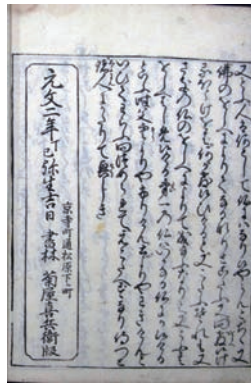
Bはこれに挿絵を加えている。上巻は第4・14・25・37・49丁、下巻は第4・14・25・37丁の次に各1丁、計9丁（18面）が加わっており、丁付はウラノド下部欄外に又丁で「上ノ又四」のごとく記される。新たに彫っただけあって、本文より挿絵の方が鮮明である。刊記は「元文二年（丁巳）弥生吉日 京寺町通松原下ル／書林 菊屋喜兵衛」。

CはBとほとんど同じだが、上巻冒頭の4丁分（恐らく版木1枚分）は覆刻（かぶせ彫り）で新しくしている。その際、第4丁ウラ2行目「べかめれ」に「べかづめれ」と撥音のカタカナ表記を加えているのが注意される。冒頭のみを改版したのは、全体を新刊に見せかける策略であろうか。

DはCの後印であるが、刊記の書林名を削除、下巻末尾に敦賀屋九兵衛の広告を1丁加えている。



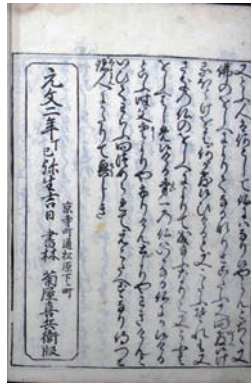
3 B上巻4丁ウラ・又4丁オモテ



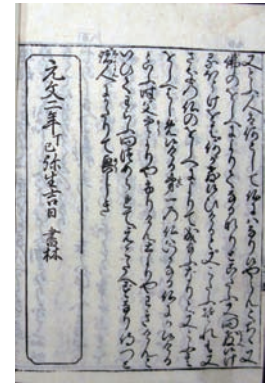
3 B刊記



3 C上巻4丁ウラ・又4丁オモテ



3 C刊記



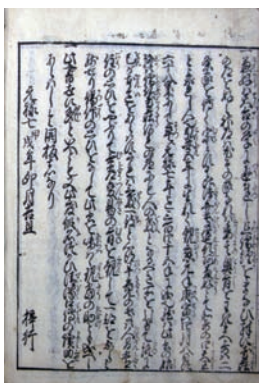
3 D刊記

4 徒然草 元禄7年(1694)刊 2巻2冊 半紙本

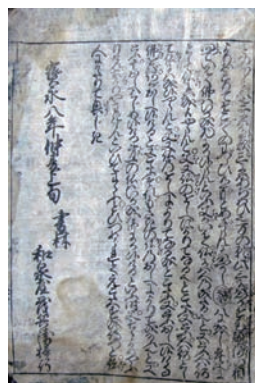
上下巻とも、冒頭に兼好が草庵で読書する様子を描いた口絵と、各段冒頭の文章を列挙した目録(目次)を載せる。下巻末には兼好の略伝あり。上巻13面、下巻10面の挿絵(いずれも半丁)を載せる。本文、四周单边無界10行20字前後、段毎に改行、各段冒頭上欄に段数表示、句点(●)・ふりがな・濁点・「スム」注記・撥音「ン」注記あり。下巻末に「此書世に多しといへとも此度仮名つかひ清濁口伝の読曲(よみくせ)をあらはし令開板者(開板せしむるもの)なり」と自慢するだけあって、正しく音読できるように配慮された本文である。

5 徒然草 宝永8年(1711=正徳元年)〔京〕和泉屋茂兵衛刊 2巻2冊 大本

表紙に鍮泥(金泥のイミテーション)で草花の下絵を施す。これは嫁入本と呼ばれる、上級武士や豪商などの嫁入道具として作られた豪華な写本の表紙を模したもの。上巻6面、下巻5面の挿絵があるが、それぞれ上下に分割して別の絵を載せているので、計22図となる。本文、四周单边無界13行30字前後、段毎に改行せず追い込み、各段冒頭に段数表示あり。句点(○)・ふりがな・濁点あり。全体に窮屈な印象があるが、同時代の浮世草子の版面とよく似ていて、そういうものを読み慣れた読者に不都合はなかっただろう。



4刊記



5刊記

[Ⅲ] 歌集の写本

昨年度の「書誌学特殊講義Ⅰ（勅撰集）」では『詞花和歌集』の伝本の本文を校合するという作業を学生たちに経験してもらいました。7の鶴見大学図書館所蔵のを含め24本もの伝本を比較しました。今年度の「古写本演習」では、勅撰集のうちあまり伝本研究の進んでいるとは言えない十三代集の写本を中心に学生たちに調査してもらっています。その中から今回はこれまでの貴重書展では出陳することのなかった伝本（8～9）を紹介します。また、12はドキュメンテーション学科初の卒業生が卒業論文に取り上げた『後鳥羽院御自歌合』です。今回の解題はその卒業論文の成果を踏まえて書きました。

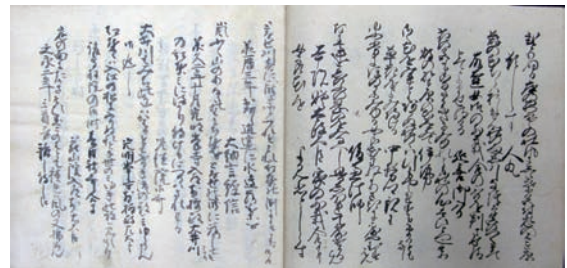
6 詞花和歌集 綴葉装1帖〔室町末〕写

紫苑色表紙（24.7×17.5 糎）。外題、表紙左肩朱色地金泥龍紋短冊「詞花和詞集」（本文とは別筆か）。内題、「詞花和歌集巻第幾」。料紙、斐紙。毎半葉10行。字面高さ、約21.0 糎。和歌1行書、詞書を約2字下げに記す。墨付、68丁。遊紙、前1丁、後2丁。

初度本と二度本との分類基準（井上宗雄氏『天理図書館善本叢書 後撰和歌集 別本／詞花和歌集』解題等の分類）となる精撰段階で除かれた6首（8・11・199・239・379・403）をすべてもたず、また諸本に見られる異本歌や歌順の乱れもない。以上の特徴から、本書は二度本系統の最終的完成形態の伝本と考えられる（井上氏分類の二度本系統(二)のイ）。

7 続古今和歌集 綴葉装2帖〔室町末〕写

鬱金色地牡丹唐草文様裂表紙（16.7×17.4 糎）。見返し、金銀切箔散。外題、表紙左肩金砂子散霞引短冊「續古今和歌集 上（下）」（本文とは別筆）。内題、「續古今和歌集序」（真名序）「續古今和歌集巻第幾」。料紙、斐紙。毎半葉14行。字面高さ、約14.1 糎、和歌1行書、詞書を約2字下げに記す。墨付、上帖5折97丁、下帖5折88丁。遊紙、上帖前1丁後2丁、下帖前1丁後3丁。



左の丁から1折分が補写。

上帖の見返しに布目地金泥麻葉文様の極札様の紙片が貼付され（極印なし）、「堀川宰相康親卿（続古二冊、内一折／松崎殿俊章朝臣）」と記されている。指摘のとおり上帖第4折のみ別筆で、改装の際の誤綴か第2折と第3折の順序も逆に綴じられている。ただし、極札（？）にいう堀川康親は該当者が見当たらない（あるいは中山康親1485-1538の誤りか）。一方の松崎俊章は俊完（1609-1662）の次男として系図類（『系図纂要』藤原氏・小川坊城、『諸家伝』）によれば万治三1660年に従四位上）に確認できる。

本文についてここで詳細を述べる余裕はないが、撰集途中で除かれた歌のほとんどを有する一方、切り入れられた歌も見られ、『続古今和歌集』竟宴以前の姿を伝える伝本と考えられる（佐藤恒雄氏「石橋年子蔵『続古今和歌集』（巻下一帖）について」〈中世文学研究21・平成7年8月〉で代表的な伝本として上げられている京都府立総合資料館甲・乙両本に近似するか）。

8 新後撰和歌集 綴葉装1帖〔江戸前期〕写

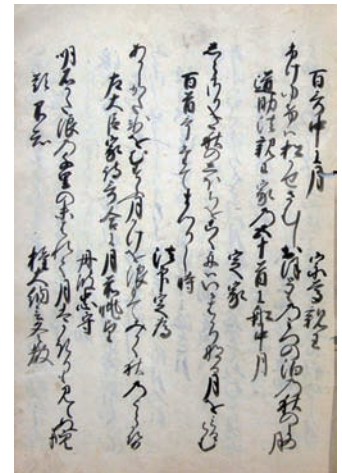
朽葉色地花唐草文様裂表紙（24.6×17.7 糎）。外題、表紙左肩朱色地金泥霞引秋草下絵短冊「新後撰和歌集」（本文同筆）。内題、「新後撰和歌集巻第幾」。料紙、斐紙。毎半葉10行。字面高さ、約21.2 糎、和歌1行書、詞書を約1字下げに記す。墨付、12折201丁。遊紙、前1丁、後4丁。遊紙に「藤井文庫」（藤井隆氏）の印を捺し、前表紙見返写に同氏による「本書は流布本との相違甚だ多い異本である／寛文頃の書写 藤井隆」と記した貼紙を貼付する。

詳述はさけるが、『新編国歌大観』本（書陵部蔵吉田兼右筆本）には見られない異本歌を多くを有し（一部は小字補入）、また歌順にも多くの違いが見られる。

9 続千載和歌集 綴葉装2帖〔江戸前期〕写

縹色地金砂子雲形文様表紙(24.5×16.3 糎)。見返し、金砂子散。外題、表紙左肩朱色地金泥草木下絵短冊「續千載和歌集 上(下)」(本文とは別筆)。内題、「續千載和歌集巻第幾」。料紙、斐紙。毎半葉12行。字面高さ、約20.6 糎、和歌1行書、詞書約2字下げに記す。墨付、上帖6折112丁、下帖6折113丁。遊紙、下冊後1丁。印記、「遠藤氏/家蔵圖/書之記」(各帖1オ・未詳)の他、判読不能の朱印1顆あり(下帖1オ)。

『新編国歌大観』本(書陵部蔵吉田兼右筆本)に比べ、和歌の有無、歌順に多くの異同が見られ、異本歌のありようから河野美術館本と同系統の伝本と推測される。



10 実方集・頼実集 袋綴1冊〔江戸後期〕写

『実方集』と『頼実集』の合写本(同筆)。布目地水浅葱色表紙(27.6×20.0 糎)。外題、表紙左肩打付書「實方集/頼実集 完」(本文同筆)。内題、「實方集」(1オ)、「故侍中左金吾家集」(20オ)。「侍中」は藏人「左金吾」は左衛門の唐名)。料紙、楮紙。毎半葉12行。字面高さ、約21.6 糎、和歌1行書、詞書を約4字下げに記す。墨付、30丁。巻頭に「知足庵」「浪華/高氏/家蔵」(以上未詳)「紅梅文庫」(前田善子氏)の印を捺す。

『実方集』は161首で『私家集大成』解題(神作光一氏)によれば伝本数のもっとも多い群書類従本系。『頼実集』は『私家集大成』解題(千葉義孝氏・藤岡忠美氏)によれば同じく群書類従本系統であるが、群書類従本にはない作者勅物を巻末に有する点で貴重な伝本である(松平文庫本も作者勅物を持つが、巻頭に置かれている)。

11 国基集 袋綴1冊〔江戸後期〕写

布目地水浅葱色表紙(27.6×20.0 糎)。外題、表紙左肩打付書「国基集」(本文同筆)。内題、「国基集」。料紙、楮紙。毎半葉10行。字面高さ、約17.6 糎、和歌2行書、詞書約3字下げに記す。枡型本を臨写(透写)したものか(虫損の跡なども忠実に移す)。墨付、28丁。遊紙前後各1丁。10と同じく「紅梅文庫」旧蔵(『私家集伝本書目』によれば志香須賀文庫にも紅梅文庫旧蔵本『国基集』があるという)。

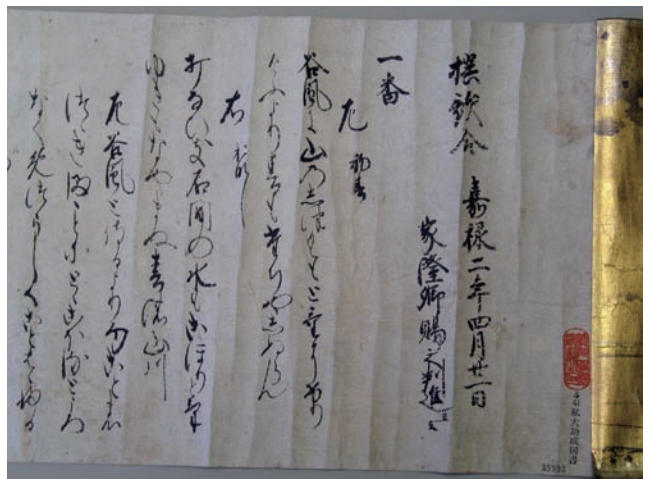
本書は『私家集大成』解題(上野理氏)にいう第2類本(91番歌の1首を欠く)。内題下に「…契沖本、豊秀本再校無異」とあり。本文中に見られる藍朱2種の書入の内、藍が契沖本との校合書入で、朱によるものが豊秀本か(「豊秀」については未詳)。

12 後鳥羽院御自歌合 卷子装1軸〔室町前期〕写

緑青色地唐草宝尽文様金欄表紙(27.7×26.7 糎)。金銀霞引下絵題簽が押されるが、傷みがはげしく判読不能。見返し、銀泥霞引・金銀野毛散・銀唐草文様の布目地金紙。内題、「撰歌合<嘉禄二年四月廿一日/家隆卿賜之判詞云々>」。1紙約27.3×33.2 糎の料紙(楮紙)を12枚を継ぐ。字面高さ、約23.0 糎、和歌2行書、判詞は約1字下げに記す。

二代畠山牛庵の極札に「撰歌合<四辻殿庶流季春卿>〔牛庵〕とあるが、季春の筆ではなく季春の時代より早い書写と推定される(高田信敬氏)。二重箱入り、外箱に「平瀬/蔵器」(平瀬露香・1840-1909)の印を捺す。

本学科の平成19年度卒業生の畠山茜さん(卒業論文『後鳥羽院御自歌合』の伝本研究)によって、『新編国歌大観』の底本である内閣文庫本と同系統(第一類)であり、本書は目移りなどによる誤脱が見られるものの、内閣文庫本の誤写・誤脱を訂正することのできる伝本であることが報告されている。



[IV] 浅見覚堂文庫

本学科平成19年度第1期卒業生浅見真衣の祖父である浅見覚堂(道号は天真、1915～2006)は群馬県鬼石町(現藤岡市)永源寺の天巖巖堂(てんがん・ぎょくどう)老師のもとで得度、大本山総持寺において沢木興道(1880～1965)のもと修行し、昭和15年(1940)宗務庁の特選により、埼玉県菅谷村(現嵐山町)の千手院住職となった。戦時中の応召期間を除き、約50年に渡って住職としての責務を果たした。本文庫は覚堂が修行時代から長年に渡って集めたもので、2008年3月、現住職浅見真如様より、学科に御寄贈頂いたものである。禅宗関係書、漢詩文関係書など装本(唐本を含む)102点から成る。ここに、感謝の意を込め、その一部をお披露目したい。

13 増冠傍註坐禅用心記 吉田義山編 明治20年序刊・京都貝葉書院後印 1冊 大本

太祖瑩山紹瑾(えいざん・じょうきん、1268～1325)著。山岡鉄舟題詞。指月慧印『不能語』(江戸中期成立)および陸鍼巖『冠註』(明治19年刊)に基づいた注釈書。版木が相当痛んでいるらしく、文字はかすれて読みにくい状態になっている。裏表紙に「昭和十六年六月撰心／於天曉禅苑／興道老師提唱」と覚堂による識語があり、沢木興道が栃木県の大中寺に開いた参禅道場である天曉禅苑での興道の講義のテキストであったことがわかる。

14 切紙并参訪 昭和12年浅見覚堂写 1冊 半紙本縦長

中世以来、曹洞宗では教義や儀式に関するさまざまな秘伝を「切紙伝授」という形式で師匠から弟子へと相伝した。江戸中期以降、開祖道元の思想に戻れという宗門復興運動によって次第にそのような風潮は衰えたが、全国各地には現在も当時の伝授資料が大量に伝存している。本書はその最末端に位置するものであろう。得度の師を嗣いで永源寺住職になった天巖溪保より、昭和12年3月28日に伝授されたもので、冒頭に「伝法室内式」(伝授の儀式の方法を記したものを)を付す。

15 訂正古語拾遺 明治2年観齋家塾(木村正辞)刊 1冊 大本

齋部(いんべ)氏の伝承を平安初期に記録した『古語拾遺』は、古事記・日本書紀とは異なる内容を持つ史書として珍重され、神道家や国学者のあいだで研究された。本書には、明治3年に国学者黒川真頼が大学寮蔵本と校合した結果を、その弟子の平胤昭(未詳)が本書に朱で書き入れ、さらに塙本(塙保己一の孫の忠韶所蔵本か)との異同も注記している。黒川真頼の膨大な蔵書のうち、歴史関係は関東大震災によって焼失したらしい(柴田光彦『黒川文庫目録 索引編』青裳堂書店、2001)ので、その点で貴重であろう。

16 洪範全書 寛文7年(1667)序・〔京〕武村市兵衛刊 6冊 大本

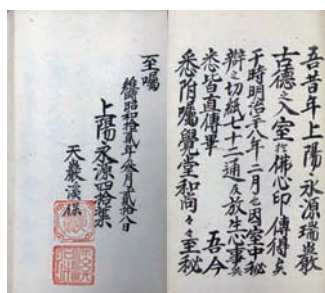
本体3巻3冊に首巻・末巻・後録各1巻1冊を付して全6巻6冊としたもの。中国宋代における『易経』解釈書。山崎闇斎の序文がある。大変刷りがよい。

17 四書集註 民国22年(1933)上海・商務印書館刊 活版 6冊 大本

宋代の儒学者朱子による注釈書(大学章句・中庸章句・論語集註・孟子集註)。第6冊末の刊記には、「中華民國二十二年九月国難後第一版」とある。前年の上海事変によって同館の印刷・編集・販売施設、および付属図書館である涵芬楼東方図書館が壊滅し、そこからやっと復興した、との文章がその上部に掲げられている。本書は昭和10年前後に旧制弘前高等学校の漢文教科書として使用されていたらしく、学生による書入が多数見られる。



13 巻首



14 奥書



15 巻尾



17 刊記